「それでも私を」
創世記 4 章 1－15 節

　アダムとエバは、エデンの園で神さまと共に祝福に満ちた生活を体験した唯一の夫婦でした。やがて彼らは子を産み、その子たちにそこでの生活がどんなに平安であったかを、また神さまの正しさ、聖さを、さらには自分たちの過ちをも何度も語り伝えたことでしょう。
　そんな中で、カインとアベルは、両親が伝える神さまの話しに耳を傾けました。そしてカインとアベルは、神さまとの交わりを持とうとして献げ物をしました。ところが、神さまは、アベルとその献げ物は喜ばれましたが、カインとその献げ物は受け入れなかったのです。
　ここで注目すべきことは、カインには自分の献げ物が目を留められない理由がわからないということです。もし、カインにもその理由が分かったなら、納得出来たかもしれません。しかし、納得できる理由は見あたらないし言ってももらえない。どうして弟ばかり優遇されるのか、そんな嫉妬がカインの心に芽生えてしまいました。

　私たちは、神の愛は誰に対しても公平だと信じています。しかし現実は平等ではありません。イエスさまがおられた時だって、イエスさまに助けを求めて願いがかなえられた人もいれば、願い通りにならなかった人もいる。ラザロは生き返った。でも、私の大事な人はそうしてくれなかった。そう思った人もいるかもしれません。現実は不条理で理不尽なことが多々あります。では、その時、私たちはどうするのか？そのことが問われているのではないかと思います。
　でも理不尽さで言ったら、カインよりアベルの方が理不尽だと思わざるを得ません。それどころか究極の理不尽はイエス・キリストです。「わが神、わが神、なぜ私を見捨てるのか」と、イエスさまは私たちの不条理と同じところにまで降ってくださいました。イエス・キリストはそこにまで行って、共にいてくださる。キリストを十字架にかけてしまった私たちの罪を「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」と祈ってくれる。その血をもって私たちの罪を清めてくださる。そして、その命を御手に抱いて復活の命を与えてくださる。ここに私たちの慰めがあります。この神の愛に私たちは希望を抱くのです。この神の愛により頼むのです。

　この時、カインは顔を伏せてしまいました。神さまから離れてしまっていたのです。そんなカインに向かって主は言われます。「どうして顔を伏せるのか」と。関係を断とうとしてしまっているカインに対して神さまの方から歩み寄ってくださっているのです。もし、この時、カインが神さまのもとへ立ち帰っていることが出来ていたなら、罪を支配することが出来ていたなら、カインはアベルに向かってこう言うことも出来た

かもしれません。「弟よ、お前の礼拝は主が喜んで受け入れてくださった。私もそのことを共に喜ぼう」と。しかし、そうはならなかった。
　カインは弟アベルに声かけ、野原でアベルを殺してしまいました。そして神さまから「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」と問われた時、彼は「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」と答えたのです。
　「罪」とは的外れという意味の言葉がもとになっています。罪というのは、神さまに心も顔も向けていない、神さまという「的」から向きがずれているということです。しかも、このずれは、ほんの少しのものでも大きなものとなってしまうことをカインの姿を通して見せつけられます。最初は小さな嫉妬だったかもしれない。それがやがて怒りとなって殺人にまで発展してしまう。そして自己防衛のために嘘で固めて、罪の上塗りを重ねてしまうのです。

　そのカインに神さまは言われます。「何ということをしたのか。」
　神さまの深い嘆きが聞こえてきます。どうしてわかってくれないのか。神の愛が伝わらない。愛する者に裁きの宣告をしなければならない神の悲しみ、痛みの言葉です。
　けれども、神さまの愛は殺人者カインであっても、「カインを殺すものは、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう」と、そのいのちを尊び守られることを約束してくださいました。七という数字は完全数でありますから、七倍の復讐とは完全な復讐を示しています。つまり、たとえ罪を犯したカインであっても、神さまが完全にカインを守られるという御心を現わしてくださったのです。神さまは、カインのいのちを守るために一つのしるしをくださいました。それはカインに出会う者が、誰もカインを殺すことが出来ないようにしてくださったしるしです。そのしるしは、カインは「わたしの子」であるという証拠です。

　間違い、失敗をする、人の命を奪ってしまう私たちをも尚も見捨てない、私たち自身に間違いを気付かせようとする神、尚も声をかけ、関わり続けようとする。どこまでも私たちを愛し続ける。どんな人をも見捨てない。それが私たちの父なる神なのです。